

祖父・太一の足跡を辿る旅 「広島県呉市」

村田嘉明（会員）



旅程1日目は、
呉市内のビジネス
ホテルに泊まり、
翌日早朝、呉市海
事歴史科学館（大
和ミュージアム）

ゴールデンウィークが始まる直前、4月下旬のある日、祖父・太一が30年間暮らした旧日本海軍の呉海軍工廠創設の地を訪ねた。太一は明治4年の廃藩置県の地

児玉源太郎宛の軍歴記録（防衛省防衛研究所）などから太一の海軍工廠在籍の事実が判明した。

前年1870（明治3）年に東京府で生まれ、その父・親太郎（旧幕臣）は「廃藩置県」により、1872（明治5）年教部省、明治7年東京府、その後、岡山県庁に明治15年まで勤務、東京へ帰京し、明治19年46歳で死亡した（親太郎が教部省に奉職の前々年明治3年11月岩倉使節団が欧米に出発した）。その息子・太一は東京の海軍造船廠に明治20年代から勤務し、同28年10月、日清戦争後の軍備拡充のため東京から広島に移動し、呉の海軍工廠創成期から大正末まで勤務し、軍艦に搭載する大砲の薬莖・火管・弾の発射実験に従事し、定年の55歳頃、海軍工廠を退職し東京に戻り、昭和7年に61歳で死亡した。明治28年10月、海軍省軍務局長（山本権兵衛）発の陸軍軍務局長、

明治28年本籍地である東京市麻布区の太一宛ての陸軍省第二軍事課から招集通知に係る、海軍側から陸軍省宛ての招集猶予が承認された記録（28ページ写真）である。私の父・庸明が残した大正5年製「皮表紙手帳」137頁、インデックス・ナンバリング付、化学式・英語表記、黒色インク・赤色インク表記各種弾丸重量表（演習弾）・六吋砲製造関係一覧表、設計図面などが記録されている。

今から100年以上前、明治時代中期から海軍の内製化が進められた。明治中期に英国の軍事技術者が技術指導後、本国へ帰国し、日本からも海軍技術将校などが長期間、英国で技術指導を受けた。前期の手帳は英国が残した英文資料等を基に、祖父・太一が火薬等製造手順書マニュアルを作成した時のものと思われる。

4階事務室を訪問し、学芸員に前述の持参した資料を見てもらった。しかし資料は100年以上前のもので内容については解説してもらえなかった。面会した学芸員の専門は「近現代史」、満州事变前後をライフワークとして研究している由。「国際善隣協会」HPを開け、満州関係の講演記録・論文を見てもらった。彼は大学院博士課程で近現代史専攻の勤務学者だった。同館4階から1階に降り、「大和ミュージアム」を地元ボランティアガイドの案内で見学した。欧州系の訪日外国人リピーターが多かった。私は祖父の調査で来たため「呉海軍工廠」創成期、明治時代からの展示を中心に見学した。今回の呉訪問は地元の海軍工廠研究家・千田武志先生（呉市参与、広島国際大学客員教授）と会うためであったが、千田先生は上京中で面会できなかった。千田先生は3月13日に放映されたNHK番組歴史秘話ヒストリア「軍港・呉と戦



艦大和」に出演されていたので知っていた。「大和ミュージアム」を後にし、隣の建物「てつのくじら館」海上自衛隊呉資料館を見学し、海上自衛隊の歴史、掃海艇の活躍、潜水艦の活躍、潜水艦「あきしお」を見学した後、1階レストランで「海軍カレー」を食べた。JR呉駅前の阪急ホテルに移動し、午後1時〜4時まで3時間コースの観光タクシーで呉の観光スポットを回った。入船山記念館（旧呉鎮守府司令長官官舎がある）、歴史の見える丘公園（戦艦大和を建造したドック跡を見下ろせる）、祖父が勤務した海軍工廠跡、そしてタクシーを走らせ標高737mの灰ヶ峰にある旧海軍の高射砲台跡に着き、360度の呉市内のパノラマ眺望を堪能した。午後4時、市内に戻り、市内有名写真館「2館」を訪問し、

大正7年1月に市内の津田写真館（昭和30年廃業）で撮った家族写真を持参し情報収集した。夕刻になり6か月前に東京からUターンし起業した友人（呉市内在住）と久しぶりに再会し、呉市内中心部で広島お好み焼きを肴に杯を傾け、旧交をあたためた。35年振りの故郷Uターンであった。

呉には明治期、日露戦争の時期から全国各地から工廠の労働者が集まり、一大軍事産業基地として栄えたが、現在は人口22万人の地方都市である。私が、現地で見た感想は市内中心部の現状はシャッター商店街でなく活気があった。

呉市は「大和ミュージアム」呉市海事歴史科学館の運営をはじめ、歴史遺産を保存すべく注力している。

祖父・太一が30年間住んだ呉の町を歩き、100年以上前の状況を想像して満足して旅を終えた。明治時代中期からの旧海軍工廠の技術が「戦艦大和」として結実したが、先の大戦で消滅し、昭和20年7月の呉空襲により市内は焦土と化した。しかし呉市内の造船業および関連産業はIHIをはじめ、その復興は早く、成長もめざましかった。祖父、父、私と3世代、明治、大正、昭和、平成、令和

と時代を生きてきたことを改めて実感した旅であった。

最後に、明治時代は積極的に西洋技術を取り入れ、日本人にとって実に激動の時代であった。日露戦争直後の1907年、日本海軍は戦艦8隻、装甲巡洋艦8隻を配備する海軍力を持っていた。

まとめ

今から100年以上前に祖父・太一が作成した「皮表紙手帳」は海軍工廠時代の「葉英・火管・弾」関係の仕事上の記述である。当時（明治後期）海軍技術者が西欧（英国）の技術を取り入れ、軍備を拡張し、日清戦争・日露戦争を勝利に結びつけたことの意義は大きい。英国の技術者から指導を受け、日本独自の技術化、内製化を達成し、太平洋戦争期の先端造船技術の集大成は、戦艦大和として結実した。

《注記》本稿では原則として「元号表記」した。しかし前段部分では元号表記と西暦表記併用した。明治期前半は近現代史の史実とリンクさせた。

私は祖父・太一の残した「皮表紙手帳」の機会があれば呉市役所を訪問し「寄贈」する予定だ。日本の「軍事史」「戦史」研究者の文献として役立てたいと思う。